In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	ヘルマン・ヘッセの『クヌルプ』について
Author	図越，良平
Citation	人文研究. 36 巻 10 号, p.743-758.
Issue Date	1984
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	岸田晩節教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

ヘルマン・ヘッセの『クヌルプ』について

図　越　良　平

I

『クヌルプ』——クヌルプの生涯の三つの物語——は1907年から13年にかけて，ガイエンホーフェンとベルンで書かれ，[1] 1915年ベルリンのフィッシャー書店より，「現代小説文庫」(S. Fischers Bibliothek zeitgenössischer Romane) の一巻として出版された。ヘッセ38歳のときである。しかし三つの物語はそれ以前に，個別的に三種の雑誌に発表されている。[2]

さて，8年間にわたるガイエンホーフェン時代 (1904—12) については筆者は別稿においてやや詳細に述べたが，[3] 要するに，それは，詩人が外的な成功にもかかわらず，当初望んでいた定住と家庭生活に，束縛と不満を覚え，放浪欲に目覚めてきた時期である。ベットガーはこの時期の詩人の生活と創作活動について次のように述べている。「人間は現存する共同社会とその慣習に結局のところ順応しなければならぬという，ガイエンホーフェン時代の数々の物語の社会的な基本構想は，ヘッセにとって，ついに耐えがたいものであることが判明した。」[4] そしてベットガーは，そのような方法での自己完成の確信が，遅くともインド旅行 (1911) とボーデン湖畔の家の売却 (1912) 以来崩れてしまったとする。市民的な結婚生活と市民的な所有の考えからの脱出を描いた小説『ロスハルデ』は，それらの事柄から結論を引き出したものであり，その限りにおいて一つの転回点をなすと彼は述べ，[5] さらにまた，『クヌルプ』は，かの『ロスハルデ』の主人公フェラグートが市民的生活を放棄した後いかなる道を辿るかという問題に，すでに一つの解答を——もちろん現実的なものではなく，極端にロマン的な，共同社会からの離脱を促し，市民的秩序の外で体験の可能性を捜し出すような解答を与えていたというのである。[6]

本作品に対しては出版年の1915年に S.ツヴァイクが，「誰も知らない，

われわれドイツ人でさえ知らないような，そして真に愛すべきドイツがそこに描かれています」とロマン・ロランに書き送ったし，F．ブラウンはこの散文の完璧性を称え，O．フラーケは，「ある意味でもはや凌駕することの出来ぬドイツの書物」と述べている。またロランもヘッセに宛てて賞讃の言葉を送っていることが，ヘッセの礼状からわかる。1930年にはA．ジードが強い関心をもってこの作品を読んだことをある手紙に書いている。[7] ところが一方，第一次世界大戦の時期にこのような牧歌的性格の小説が出たことに対して，それが現実の出来事に敵対する底意をもった意識的な挑戦であるとみなされたり，或いはまたこの作品に腹立ちを覚える者もあり，ヘッセは無責任で恐ろしく無邪気な詩人，つまらぬ男であるという不評が立ったりした。[8]

ちなみに，1915年という年はヘッセにとって多忙と多難な年であった。すなわち春に妻マリアの精神病が発病，夏にはR．ヴォルテレックの捕虜慰問の仕事，8月中旬ロマン・ロランの最初の来訪，同年末兵役の召集と免除，9月にはシュトゥットガルトやフライブルクへの旅行，10月10日には『新チューリヒ新聞』に『再びドイツで』(*Wieder in Deutschland*) という記事を載せたため，1914年11月同新聞に発表の戦争批判の文『おお，友よ，この調子をやめよ！』(*O Freunde, nicht diese Töne!*) の場合と同じく，ドイツの新聞から新たな攻撃を受けることになるのである。[9] 翌16年には父の死，末っ子マルティンの重病，妻の精神病の悪化に加えて彼自身病におちいり，危機の時期を迎えるため，1919年の『デミアン』刊行までは，詩集『孤独者の音楽』(1915)，小品集『路傍』(同)，短篇『青春は美わし』(1916) と作品の数は比較的少ない。[10]

II

本作品は，その副題にも示されているように，主人公クヌルプの人生の三つの時期を部分的に描いている。その梗概は次の通りである。

第一話「早春」　2月の中旬，放浪者クヌルプは退院後また熱の出た身体で友人の皮なめし匠ロートフースを訪ねて居候し，彼とその妻から親切なもてなしを受け，その間に知人で仕立屋のシュロッターベックをも訪ね，衣服の繕いなどして身ぎれいになり，近所の家事手伝いの娘バルバラ（ベルベレ）を散歩とダンスに誘って楽しんだりするが，ロートフース親方夫人の好意を煩わしく思い，また市民生活そのものに嫌気がさして再び旅に出る。

第二話「クヌルプの思い出」　青春時代の最中，クヌルプは夏に友人と二

人で田舎を陽気に旅しつつ人々を楽しませる。また時には二人は人生論的な会話まで交わしたりするが，ある朝，友人が目を覚ますと，クヌルプはすでに旅立ってしまっている。

第三話「最期」　今や病もひどくなり，埃まみれの姿でクヌルプはラテン語学校時代の同級生で今は医師のマホルトに出会い，手厚い看護を受ける。その時彼は学校時代に自分の身に起こった一大事件について友人に打明ける。やがて，医師の厚意で故郷の病院へ入る手筈を整えてもらうが，故郷に戻った彼はもはや入院する気になれず，その地をさすらい続け，遂には吹雪の中で神と言葉を交わしながら永遠の眠りにつく。

第一話は全集版で37ページ，第二話は20ページ，第三話が32ページと安定した構成を有している。物語方法については，第一話と第二話が第三人称形式，第二話のみクヌルプの友人を語り手とする第一人称形式というふうに変化をもたせている。構成上の特徴として作中に詩句がちりばめられているが，ローズは，これはロマン派短篇小説の習慣的なやり方であり，それらの詩は，合理的にはそれ以上記すことの出来ぬことを表現するとともに，雰囲気を高めるのに役立つと説明している。[11] この物語では放浪を中心モティーフとし，その他孤独，憧れ，故郷，遠方，友情，恋愛，死などロマン派的，抒情的なものが多い。[12] そしてここに描かれる職人の世界はヘッセが若き日，機械工場で働いた体験をもとにしていることはいうまでもない。時間設定は，第一話では1890年代のはじめであり(9)，ここではクヌルプの友人ロートフースも，同じく友人のシュロッターベックもすでに結婚しており，後者には5人の子供までいる。ところが第二話では，冒頭の「まだ陽気な青春時代(Jugendzeit) の最中」(46) という記述から，恐らく第一話より以前の時期が描かれていると考えられる。第三話ではクヌルプも友人のマホルトもすでに40歳に達している。(68) こうしてみると，この物語はクヌルプの青春時代から中年にかけてのものということになるが，さらに，第三話に到って，ラテン語学校時代の出来事にまで話が及んでいるから，それをも含めると時間の幅はかなり広いものとなる。

構成上の巧みな点としては，三つの物語において季節の進行と主人公の生の推移とが全く一致していることである。リューティはその関係を次のように表現している。「彼［クヌルプ］は春には新たな命への蘇りと新たな放浪への出発を讃美し，盛夏には成熟して人間の本質と運命について思いめぐらし，かつ語り，晩秋と冬には萎れて死に到るのである。」[13] 各物語の雰囲気

についてみれば，「早春」では，2月半ばの雨と西風のひどい天候の中，病の身を休めるべく夕方友人の家を訪れる主人公の姿がまず冒頭で描かれることによって放浪者の強いイメージを植えつけられるために，たとえ温かい友人の世話や家事手伝いの娘とのつかの間の楽しみはあるにしても，やはりどちらかというと佗びしさが漂う。「最期」では，主人公の病がもはや回復不可能なところまで進んでおり，死の予感に満たされた暗さが感じられる。この両者の間にあって，「クヌルプの思い出」は少なくとも外的には明るい色調を帯びている。„Wir wanderten damals, er [Knulp] und ich, in der glühenden Sommerszeit durch eine fruchtbare Gegend ***und hatten wenig Sorgen.***“ (46)（イタリックは筆者）これはその冒頭の言葉であるが，クヌルプは友人と放浪の途中，晩には農民たちに話を語り，子供たちに影絵をし，娘たちに歌をうたってやる。またある時は，「ドイツの手まわしオルガン歌集」からおどけた歌を読んで聞かせたり(53)，上機嫌のクヌルプとそれに感染した友人は出会う人ごとに挨拶したり，二人で冗談を言いあい，通りすぎる農夫や馬や牛にまで綽名をつけたりするほどである。(61) したがって，この第二話は，未だ病に犯されていないと思われるクヌルプの陽気な行動を十分に描いている点でたしかに他の二話とは趣を異にしている。

さて次に空間設定について考察するならば，クヌルプの放浪は生れ故郷の南ドイツから，北へ向かってはブラウンシュヴァイクにまで及んでいる。(16) 作中には数多くの地名が出てくるが，プァァイファーの注釈[14]によれば，その多くは架空のものであるから，読者はそれらによって主人公の移動ということにのみ目を向ければよいであろう。例えばクヌルプはノイシュタット (Neustadt) の病院に4，5週間入院していたと言っているが (27)，この地名も実際には数多く存在し，その中のどれなのか定かでない。また友人ロートフースの住むレヒシュテッテン (Lächstetten) にしても，クヌルプの生れ故郷シュヴァルツヴァルト——これはクヌルプと同郷の家事手伝いの娘バルバラとの会話から明らかである。(22)——からどの方向にどの程度離れているのかも全く不明である。ただ，死を前にして彼がひたすら帰るのを望む故郷の町ゲルバースアウ (Gerbersau) は詩人ヘッセが故郷の町カルフを表わすのにしばしば用いた名称であり，単なる架空の名以上の意味をもっている。ミレックによれば，その名はカルフにあるヘッセの好みの魚つり場の一つ，すなわちナゴルト川沿いの皮なめし業者の草地に由来するという。[15]

さて本作品には特にこみ入った伏線といったものは見あたらないが，「ク

ヌルプの思い出」にみられるクヌルプの夢の描写は，3ページ余りにもわたっている。(54-57)　しかもそれは彼が前年の秋見て以来，さらに全く似た形で二度みているというものである。(54)　ここに現われてくるのは彼の故郷であるが，はじめは町の様子もどこか故郷のそれとは趣を異にし，人々もよそよそしく，さながらクヌルプが空気ででもあるかのようにそばを通りすぎる。(55)　やがて二番目の恋人リーザベットに会った後は町も人々も昔と同じ様相を呈してくるが，その時には，故郷ではすべてのものを失ってしまったという恥辱感（56）と両親，兄弟，姉妹を顧みなかったことに対する自責の念が湧いて来るのである。(56-57)　いったい，この描写は何を意味するのか。それは恐らく放浪中にもその意識下に強く宿る帰郷願望の表出であり，そういう意味から，これは第三話の帰郷の重要な伏線になっていると考えられる。

物語は比較的淡々とした調子で語られて行くが，時に読者に強い印象ないしは衝撃を与える個所がいくつか存在する。それは，まず第一話において，5人の子供をかかえ（27），生活の苦しさに不満をもらすシェロッターベックに対してクヌルプが，自分には二歳になる息子のいること，母親はお産で死に，子供は他人に引取られたため，時たま姿を見ることはあっても，手も握れずキスも出来ぬことを打明けて，子供のいることを喜ぶようにと忠告する件（30）である。この出来事はよほど彼の心の痛み[16]となっていたとみえ，第三話で死の間際，小さな男の子を抱いたかつての恋人リースベットの姿が浮んで来，良心の呵責に苦しむのである。(95)　第二話ではすでに述べたようにクヌルプは外的な行動面では底抜けに陽気である。ところが彼が友人と交わす会話においては彼の無常感と，人間相互間の隔絶感のようなものが吐露される。そして，何よりも重大な，クヌルプの人生の方向を全くかえてしまった事件，すなわち少年時代の苦い失恋体験［二つ年上のフランチスカ(74)の裏切り行為］が第三話に到って物語られ，ここで読者ははじめて，クヌルプが放浪の人となったいきさつを知らされることになるのである。これは最重要事を最後まで伏せておくというまことに巧みな語り方というべきであろう。リースベットの名は先に述べた第二話の夢の中ではじめて出てくるが，その段階で彼女が彼の子供の母親であることを感じとるのは少し困難であろう。ところで主人公クヌルプがアイヒェンドルフの短編『のらくらものの生活から』(*Aus dem Leben eines Taugenichts*)（1826）の主人公の後裔であるとはよくいわれるところであるが，ベットガーは，とくに両作品

の冒頭と結末を比較して，一方は主人公が病み疲れた身体で病院から出てくるところに始まり，最後は雪の中で死ぬのに比べ，他方は，主人公の心は永遠の日曜日のようであり，幸福な結婚というハッピーエンドになる点をとりあげ，現代作家とロマン派作家との相違点を浮彫りにしているのである。[17]

それにしても，ヘッセはクヌルプに対しては特別な感情を寄せていた。1915年のロラン宛の手紙では，クヌルプを「自分の兄弟」[18]と呼んでいるし，また後年（1954）ある人に宛てた手紙では次のように書いている。「ある時，何年もたってから私がブルーノ（筆者注。ヘッセの長男）と共に，私の故郷の山間の平地と故郷の小さな町カルフを再び訪れた時，私は驚くべき経験をしたのでした。つまり，通りのどこにでも歩いているのを見たか，或は少くともそこにいるのに気づいたのは私の両親や祖父母の姿でもなければ，私自身の少年の姿でさえなく，クヌルプだったのです。そして，その時はじめて私には，自分にとっては，クヌルプと故郷とが一つになっていたのだということがはっきりわかったのでした。」[19]一方，息子の方はその時のことをプファイファー宛の手紙で次のように書いている。「あの時（1931年），父はカルフではほとんどただクヌルプのことしか話さず，私に，クヌルプと関係のある家々や通りを見せ，自分自身の幼年時代や青春時代についてはほとんど語らなかったので，私はいくらか失望しました。」[20]

Ⅲ

本章では主として主人公クヌルプ自身について考察してみたい。その場合彼の外的な面と内的な面にわけられるが，まず前者から眺めてみよう。作者はとくに第一話において，彼の身体的特徴を念入りに描いている。しなやかで細く長く，はげしい仕事でそこなわれていない手（12，25，32），黒い髪，屈託のない顔の子供のような美しさ，柔らかく明るい顔と濃いまゆ毛，やせてはいるがトビ色に日やけした頬，品のいい桃色の口，しなやかな首(17)，美しい目（43）—— まことにハンサムな若者の条件を全部そなえた人物であり、ロートフース親方夫人が彼に好意を抱くのも当然である。一方、彼の身だしなみと行動はどうか。まずロートフース親方は、クヌルプの所持している旅職人手帳の入念な取扱い方に感心している。そして、この放浪者は「新調同然の服」（13）を着、「茶色のソフトをあみだにかぶり」（25）、「軽快にしなやかに」（25）歩く。隣家の家事手伝いの娘ベルベレに対しては、「複音や顫音を伴う、技巧にとんだヨーデル調の曲」（23）を口笛で吹いてやる。

自分の靴は「徹底的にきちんと、それでいて遊びのように」(24)磨く。仕立屋に針と糸をもらっては「まめな指で」(27) 服の繕いもやってのける。どんな手仕事でもたいてい知っていて，ひどく専門的な質問をする (25) かと思うと，見事な手さばきで品よくトランプを扱うことを心得えているし(32)，不平の多い仕立屋のシェロッターベックには聖書のすばらしさを説くことも出来る。(29) また，言葉巧みにベルベレを散歩とダンスに誘いだしてホームシックを慰めてやり，彼女からはダンスのうまさをほめられる。(34-35, 40-42) 青春時代には友人と楽しく陽気に旅をしつつ人々を楽しませたことはすでに述べたが，途中モクセイソウを折って帽子にさしたり(47)，また野菊を耳のうしろにはさむような酒落気もある。太陽を讃える屈託のない詩をつくり (61)，アコーデオンを奏でることも出来る。(71, 94)

以上のことから，クヌルプの人物像を描くならば，几帳面で清潔を尊び，明朗で他人への思いやりに満ちた詩人ないしは芸術家肌のいく分伊達好みの美男子ということになるであろうか。彼にはいたるところに立派な友人がいた (14) といわれるのも彼のこうした資質によることは間違いない。いったい，彼の身分は何なのか。シュトルテは，徒弟期間を終え，職人 (Geselle) としての自由な遍歴時代の後，市民生活につくことの出来ぬ旅職人 (Handwerkerbursche) と言っている。[21] たしかに彼は旅職人の手帳 (Wanderbüchlein) (13) を持ってはいるが，「無職の流浪者として」(als arbeitsloser Landstreicher) (14) という言葉からもわかるように，盗みや物乞いはしないまでも (14)，実際にはかなり自由気ままな生活を送っていたと考えられる。そして彼の人生態度は，「人生から眺めること (das Zuschauen) しか欲しない」(25) というものであった。この傍観者的態度は，さまざまの秩序に縛られ，あくなき物質的要求に心を煩わす市民の生活態度とは真っ向から対立するものである。これは一見非常に消極的な態度に見えるが，人生の瑣事にとらわれぬ暮し方として，やはり人の心を惹きつけるものがあるのである。したがって，クヌルプに放浪をやめるように忠告した (19) ロートフース親方も内心彼を羨まずにはおれず，それどころか彼のあり方を肯定しさえするのである。

„Nein, der Knulp hatte recht, wenn er so tat, wie sein Wesen es brauchte und wie es ihm nicht viele nachtun konnten, wenn er wie ein Kind alle Leute ansprach und für sich gewann, allen Mädchen und Frauen hübsche Sachen sagte und jeden Tag für einen Sonntag

nahm.“ (25-26)

それにしても，わずか三晩ロートフース親方の家に泊っただけで（①到着の日の晩，②床につく前，窓からベルベレの部屋を見た次の晩，③彼女とダンスを踊った晩），クヌルプは早くも市民生活に嫌気を覚え放浪に駆られている。親方の居間の心地よさを感じながらも「結婚するのは引き合わない」(25) と考え，親方夫婦の家の静かな平和や友人の勤勉そうな顔を見ても気に入らず，もし夏ならば一刻たりともそこに留らないだろうと考える。(32-33) 所帯や結婚生活の幸福についての友人の話をも「一種のあざけりをもって」(39) 思い出している。さらには晩，体育館のそばでベルベレを待つ時にも，シュヴァルツヴァルトへの放浪に思いを馳せるといった具合である。このような放浪願望が，ガイエンホーフェン時代のヘッセのそれの具現化であるとしても，作品に即して考えた場合，主人公をそれへと駆りたてるのはいったい何なのか。ここでわれわれは，ツェラーやミッセンハルターが指摘しているように，[22] 陽気なクヌルプとは別の孤独な側面をもった彼を考えないわけにはゆかぬ。彼がいわゆる正道を踏みはずす原因となったのは，いうまでもなく14歳の時の，フランチスカの裏切行為による残酷ともいうべき失恋である。ミッセンハルターは，この出来事以後，彼は幸福への期待を失ってしまい，失望に対する恐れが，定住する小市民としてあらゆる人間生活の不完全さと不自由さに慣れてしまわぬ中に密かに逃げ出すことを教えた，と言っている。[23] ところで，主人公に深刻な傷となって彫みこまれたこの体験は，彼自身言っているように，何よりも人間の言葉に対する不信である。

„[...] ich [Knulp] habe nie mehr mich auf das Wort eines Menschen verlassen oder mich selber durch ein Wort gebunden. Niemals mehr. Ich habe mein Leben gehabt, wie es mir paßte, und es hat mir nicht an Freiheit und Schönem gefehlt, aber ich bin doch immer allein geblieben.“ (77)

人間の言葉を信じられぬということは，とりもなおさず人間性と人間関係に信頼を寄せることができないことである。[24] 第二話で，彼が友情や恋愛も結局のところ永遠には続かぬという無常感を表明し，さらには，二人の人間の間には常に「深淵が口をひらいている」(51) ことを友人よりも先に知っており，魂の孤立性について次のように述べていることも，やはりかの少年の日のあまりにも強い衝撃にその遠因があると考えられるのではないか。

„Ein jeder Mensch hat seine Seele, die kann er mit keiner anderen

vermischen. Zwei Menschen können zueinander gehen, sie können miteinander reden und nah beieinander sein. Aber ihre Seelen sind wie Blumen, jede an ihrem Ort angewurzelt, und keine kann zu der andern kommen, [...]" (57)

だが，このような人間相互の間の隔絶感はヘッセにあっては必ずしも目新しいことではなく，すでに『ペーター・カーメンチント』(1904) の同名の主人公や『ゲルトルート』(1910) の主人公クーンにおいても見られるところであり，さらには，かのよく知られた詩『霧の中で』(1905) にも色濃く現われているのである。クヌルプがフランチスカとの一件以来，人間社会の，とくに市民生活の煩わしさを脱し自然の中をさすらうに到ったことは十分に考えられることである。ローズは，ペーター・カーメンチントやハンス・ギーベンラート［筆者注。『車輪の下』(1905) の主人公］のような内向的な人間として，彼もまた文明のもつ種々の複雑さに対処出来ず放浪者になる旨述べている。[25]

ところで，主人公クヌルプをばシュミートが「小さな聖者」[26]，ボウルビィが「聖者の卵」(the budding saint)[27]，ローズとコロディが「アッシジの聖フランチェスコの兄弟」[28]，ミッセンハルターが「賢者」[29]と呼んでいるのは注目すべきである。何をもって彼を聖者というのであろうか。シュミートはその理由として，クヌルプが終始子供であったことを挙げている。[30] われわれが最初に眺めたクヌルプのもつ明るい面は聖者の心に通じるものでありまたクヌルプが太陽讃美の歌をつくっていたことを思い起こせば，すべての自然の事物を友とした，かのイタリアの聖者の兄弟と言われるのもうなずけるところである。なお，別の観点からベットガーは，クヌルプのそなえている子供らしさ (Kindlichkeit) をかなり詳細にとりあげ，市民や小市民とは違って彼がそれを持ち続けることが出来たことを指摘している。[31] ちなみに，クヌルプは第一話冒頭の歌の中で自分を「放蕩息子」(der verlorene Sohn) (9) になぞらえているが，ヘッセは後年『ナルチスとゴルトムント』(1930) において，ナルチスに「放蕩者の生活が聖者の生活へのいちばんの近い道の一つであり得ることを，君（ゴルトムント）は知らないのかい」[32]と言わせていることを思えば，クヌルプを聖者視する説が一層理解しやすくなるといえるのではないか。しかし，ここに一つ難しい問題が生じてくる。すなわち，一方ではかの少年時代に人間に対する不信の念を植えつけられ，そのために市民世界を離れて孤独の中にさすらいながら，今一方では世の人々と屈託なく親

しく交わり，聖者ともみなされるこの相反する性格をわれわれはどう考えればよいのであろうか。思うに，彼は究極的には徹底した人間不信に陥ることがなく，また厭世的な世捨人にはならず，人間に対する深い愛情が心の奥底に残っていたというべきであろう。なぜなら，もしそうでなければ，彼の明るさは単なる装った欺瞞的なものになってしまうからである。

さて，ここでわれわれは，クヌルプが第二話において繰りひろげている無常についての考えを今一度，今度は美的観点から考察してみよう。彼の場合，無常であることが最も美しいものを成立せしめる前提となっている。

„Ich [Knulp] denke, das Schönste ist immer so, daß man dabei außer dem Vergnügen auch noch eine Trauer hat oder eine Angst.“ (49)

この「悲しみ」や「不安」の感情をひきおこす原因となるのが無常なのである。美しい娘もやがて年老いて死ぬ運命にあり，人はそこに悲しみを感じるが故に美しいのであり，また，花火は最も美しくなった瞬間に，すぐまた消えるという不安感を人にいだかせるために一層美しいというのである。このように美と滅びとは密接に結びついているというのがクヌルプの美意識である。ところで，ヘッセが「中世のクヌルプ」[33]と呼ぶところの同じく放浪者であるゴルトムントの場合は，同じく無常を問題としながらも，それの克服の方向をめざしている。そして，それを成就するのは他ならぬ芸術作品の創造である。つまりこの行為によって「無常なものを永遠化する」[34]のである。ゴルトムントはこの自覚に立って遂に芸術家となり，修道院でダニエル院長の像の他，四福音書の著者の像などを仕上げるに到っている。確かにクヌルプも詩をつくり歌をうたう芸術家的気質をそなえてはいるが，彼の場合，その活動は折に触れてのいわば即興的行為に終っており，作品として書きとめられたものはほとんどない。この点から考えてゴルトムントの場合は，クヌルプに較べて人間的成長の度合がはるかに高くなっていると言えよう。リューティは，ゴルトムントの放浪生活はその作品によって歴史的存在に入ると述べている。[35]次に，クヌルプの人生観の特徴をみるならば，シュナイダーも指摘しているところであるが，[36]彼が生れ変わりの思想をもっていることである。例えば，クヌルプが死後のことを内容とするたわいもないと思われる歌——„[...] Wenn ich wiederkomm, / Wenn ich wiederkomm, / Bin ich ein schöner Knabe.“ (48)——を口ずさんだ後，道で出会った雌牛を引いた男の子のようなのになりたいと述べている個所や，或はまた友人マホルト宅で，死を前にした彼がひそかに友人に感謝の念をこめて書きとめた詩

にも再生の思いがこめられている。—— „Und die Menschen / Müssen sterben, / Man legt sie ins Grab. / Auch die Menschen sind Blumen, / Sie kommen alle wieder, / Wenn ihr Frühling ist. / Dann sind sie nimmer krank, / Und alles wird verziehen.“ (80)

最後にクヌルプの放浪の結末の場面を眺めてみたい。彼の放浪生活は自由気ままではあるが，Ⅱにおいても触れたように，彼は夢の中で故郷の身内を思い，自責の念をいだいたし，第一話では，彼がたえず放浪を続けながらも，「妙な不安と懐郷心にかられて」(16) 再三にわたって南ドイツへ引返したとある。要するに身は異郷にありながら心はたえず故郷を思っていたのである。その彼が死を予感して一層帰郷心を募らせるのは至極当然である。—— „Aber sterben wollte er [Knulp] nicht, ehe er Gerbersau wiedergesehen und allerlei heimlichen Abschied dort genommen hätte, [...]“ (79) 彼が別れを告げたいと思ったのは川や橋，広場や父の昔の庭，そして驚くなかれ彼を躓かせた張本人のフランチスカであった。やがて帰郷し，故郷の空気を思う存分吸い込み昔を懐かしんだ彼も，彼女がもはや生きていないことを知るや，「何もかも色あせてしまい，ただ彼女ゆえにもどってきたように思われた」(88) のである。いったい彼はここに到って彼女に何を期待していたのであろうか。彼女の不実ゆえに故郷を離れ，さすらわなければならなかったにもかかわらず，なおも死に際に会うことを望んでいるのはいささか哀れでもある。それはともかく，帰郷の望みを果した彼も，その後は石工のシャイブレに会っただけで，もはや故郷のまわりを「あてどなくさまよい」(92)，「あやまった一生のもつれの中にいよいよ深くはまりこんで，なんの意味も慰めも見出すことができなかった」(92) のである。それでもなお降りしきる雪の中を疲れはてて，もはや自分の意志ではなく，「足がひとりで歩く」(93) ままにさすらい続ける様はまさに悲壮というほかない。さて，作品の結末に描かれるクヌルプと神との対話は5ページにも及んでおり，ここで彼の一生の総決算がなされるのである。今も述べたように彼は最初自分の人生が誤りだったと考えている。それ故，神の前に出た時には，フランチスカとの体験以後も自分を生かし続けた神に非難めいた言葉を発するとともに，恋人リースベットに対する良心の呵責をも口にしている。しかし，それにもかかわらず神はクヌルプに彼の人生におけるよきこと楽しかったことの数々を思い起こさせ，彼にその生涯を肯定させるのである。クヌルプが行なったことはすべて神の意志であったというのである。

„Sieh", sprach Gott, „ich habe dich [Knulp] nicht anders brauchen können, als wie du bist. In meinem Namen bist du gewandert und hast den seßhaften Leuten immer wieder ein wenig Heimweh nach Freiheit mitbringen müssen. In meinem Namen hast du Dummheiten gemacht und dich verspotten lassen; ich selber bin in dir verspottet und bin in dir geliebt worden. Du bist ja mein Kind und mein Bruder und ein Stück von mir, und du hast nichts gekostet und nichts gelitten, was ich nicht mit dir erlebt habe." (96)

ところで，神がクヌルプに現われるのは，ローズは夢の中だとし，[37] ミレックは病気による譫妄状態においてであるとみなしている。[38] 見方によっては，この神との対話はクヌルプ自身の内部での自省ないしは自問自答の詩的表現と考えられぬこともない。しかし，彼の生涯を最終的によしと判定するのは，やはり人間を超えた神とするのが効果的なことはいうまでもない。そしてまた神の示現によって作品に崇高さが醸しだされ，その空間が拡大されることにもなるのである。

神の声はやがて，「母の声のように，ヘンリエッテの声のように，そしてまたリースベットの声のように響く」(96) が，ここにはすでに後の『ナルチスとゴルトムント』の結末で，ゴルトムントが「母」のことを語りつつ死に赴く場面を思い起こさせるものがある。[39] それにしても，現実の世界に起こる雪中での行き倒れは悲惨極まりない光景を呈するに違いないが，この作品の中では不思議とそのような印象を与えない。それは恐らくクヌルプがここではもう苦しい最後のさすらいを終えて神という絶対者にやさしく抱かれているものとして描かれているからであろう。さらに言うならばヘッセの表現力の冴えが，本来暗い死の場面を，逆に明るい光のもとに置くことによって，みごとにその暗さを消し去り，死の象徴である雪さえも[40] 神々しく輝いているかのようである。こうして詩人はクヌルプの死を安らかな眠りに変容させたのである。これこそまさに文学的表現の極地という他ない。本作品の最後の描写がそれを表わしている。

„Als Knulp die Augen nochmals auftat, schien die Sonne und blendete so sehr, daß er schnell die Lider senken mußte. Er spürte den Schnee schwer auf seinen Händen liegen und wollte ihn abschütteln, aber der Wille zum Schlaf war schon stärker als jeder andere Wille in ihm geworden." (97)

文　　献

作　品

Hermann Hesse, *Gesammelte Schriften* III, V. Berlin/Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1958. (=GS. III, V) [但し,『クヌルプ』(GS. III) からの引用の場合には,引用文の直後にページ数のみを記す。]

[邦訳書]『クヌルプ』高橋健二訳, ヘルマン・ヘッセ全集第5巻 (『放浪と懐郷』の中), 新潮社, 昭和32年。

『知と愛——ナルチスとゴルトムント』高橋健二訳, ヘルマン・ヘッセ全集第9巻, 新潮社, 昭和35年。(訳文については上記邦訳書のものを拝借ないし, 参照させていただいた。)

ヘッセに関する参考文献

F. Böttger, *Hermann Hesse. Leben・Werk・Zeit* Berlin : Verlag der Nation 1974. (=Böttger)

M. Boulby, *Hermann Hesse. His Mind and Art.* Ithaca / London : Cornell University ²1970. (=Boulby)

A. Hsia (Hrsg), *Hermann Hesse im Spiegel der zeitgenössischen Kritik.* Bern/München : Francke 1975. (=Hsia, 但し, 執筆者名はページ数の後に括弧で示す。)

H. J. Lüthi, *Hermann Hesse. Natur und Geist.* Stuttgart : Kohlhammer 1970. (=Lüthi)

J. Mileck, *Hermann Hesse. Life and Art.* Berkeley / Los Angeles / London : University of California Press 1978. (=Mileck)

M. Pfeifer, *Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken.* München : Winkler 1980. (=Pfeifer)

E. Rose, *Faith from the Abyss. Hermann Hesse's Way from Romanticism to Modernity.* London : P. Owen 1966. (=Rose)

H. R. Schmid, *Hermann Hesse.* Frauenfeld / Leipzig : Huber & Co. 1928. (=Schmid)

C. I. Schneider, *Das Todesproblem bei Hermann Hesse.* Marburg : N.G.Elwert 1973. (=Schneider)

H. Stolte, *Hermann Hesse. Weltscheu und Lebensliebe.* Hamburg : Hansa 1971. (=Stolte)

S. Unseld, *Hermann Hesse-eine Werkgeschichte.* Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1974. (=Unseld)

H. Waibler, *Hermann Hesse. Eine Bibliographie.* Bern/München : Francke 1962. (=Waibler)

B. Zeller, ***Hermann Hesse in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten.*** Reinbek bei Hamburg : Rowohlt 1973. (rowohlts monographien 85) (=Zeller Ⓐ)

B. Zeller (Hrsg.), ***Hermann Hesse 1877・1977. Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung.*** München: Kösel 1977. (=Zeller Ⓑ)

井手賁夫，『ヘルマン・ヘッセ研究』(第一次大戦終了まで) 三修社，昭和47年。(=井手)

高橋健二，『ヘッセ研究』ヘルマン・ヘッセ全集別巻，新潮社，昭和35年。(=高橋)

その他の文献

Kindlers Literatur Lexikon, VI. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1970. (=KLL) (Berechtigte Sonderausgabe für die Mitglieder der Wissenschaftlichen Buchgesellschaft)

アト・ド・フリース，『イメージ・シンボル辞典』(山下主一郎他訳) 大修館書店，昭和59年 (=イメージ・シンボル辞典) (原著名 Ad de Vries, ***Dictionary of Symbols and Imagery.*** North-Holland Publishing Company: Amsterdam/London 1974.)

注

1 Unseld S.45.

2 『早春』は1913年コッタ書店の月刊誌 ***Der Greif*** [ギリシア神話のグリュプス (ライオンの胴でワシの頭と翼を持つ怪獣)] に，『クヌルプの思い出』は1908年『新評論』(***Neue Rundschau***) に，『最期』は1914年『ドイツ評論』(***Die Deutsche Rundschau***) に掲載された。(Waibler S. 116, Pfeifer S. 127) 『早春』は1908年の『新評論』に発表されたとする説もあるが (Unseld S. 45, 高橋 S. 121, 井手 S. 429), Waibler の詳細な文献目録には見当らない。なお，ヘッセの『遺稿散文集』(***Prosa aus dem Nachlaß***) (1965) には，『クヌルプ』のための三つの習作『ペーター・バスチアンの青春時代』(***Peter Bastians Jugend***) (1902), 『キリアン・シュヴェンクシェーデル氏への手紙』(***Brief an Herrn Kilian Schwenckschedel***) (1902/1903), 『ある鞍職人の手記』(***Aufzeichnung eines Sattlergesellen***) (1904) が『クヴォルムをめぐる物語』(***Geschichten um Quorm***) として収められている。(Unseld S.45, Pfeifer S. 127)

3 拙稿「ヘルマン・ヘッセの『ロスハルデ』について」大阪市立大学文学部紀要第31巻，第3分冊 (1979) 64-65ページ参照。

4 Böttger S. 186.

5 Böttger S. 186, 年号は Pfeifer S. 42.

6 Böttger S. 187.

7 Unseld S. 44-47. S. ツヴァイク——1915年10月の手紙；F. ブラウン——1915

年の *Die Rheinlande* 誌；O. フラーケ——1915年の『新評論』；ヘッセの礼状——1915年10月4日付； A. ジード——1930年6月の H. プリンツホルン宛の手紙。

8 Stolte S. 97.

9 Pfeifer S. 43. さらにミレックによれば『再びドイツで』は，1915年9月の後半，捕虜慰問の仕事に専念するためシュトゥットガルトとその郊外を訪れたヘッセが，ベルンへ戻った時の印象を書きとめたものであるが，その記事の最初のところで，そのような仕事を「この（兵役より）もっと魅力的で平和的な仕事」と表現し，自分が兵役にかわるよう強制されなかったことを書いたため，いわゆる愛国者たちの機嫌をそこねたのである。なお，この記事は同じく10月10日の『フランクフルト新聞』にも載ったことがミレックの記述からわかる。(Mileck S. 73-74)

10 高橋 S. 277-278の年表及び Pfeifer S. 43-44.

11 Rose S. 44.

12 KLL VI. S. 5289.

13 Lüthi S. 30.

14 Pfeifer S. 128-130.

15 Mileck S. 47, Pfeifer S. 129. (筆者注。Gerber は皮なめし屋，Au は川沿いの草地の意。)

16 シュナイダーはこれを「精神的外傷」(Trauma) と呼んでいる。(Schneider S. 283)

17 Böttger S. 188.

18 Unseld S. 44.

19 Unseld S. 44, 46. E.モルゲンターラー宛の手紙。

20 Pfeifer S. 343.

21 Stolte S. 95-96.

22 Zeller Ⓐ S. 71, Hsia S. 139 (H. Missenharter).

23 Hsia S. 139 (H. Missenharter).

24 Rose S. 42 も参照。

25 Rose S. 42.

26 Schmid S. 81.

27 Boulby S. 78.

28 Rose S. 43, Zeller Ⓑ S. 214.

29 Hsia S. 138 (H. Missenharter).

30 Schmid S. 81.

31 Böttger S. 191-193.

32 GS. V. S. 38.

33 Unseld S. 132, Pfeifer S. 197. H. ヴェルティ宛のヘッセの手紙（1928年12月19日付）。

34 GS. V. S. 278.

35 Lüthi S. 96.

36 Schneider S. 112.

37 Rose S. 43.

38 Mileck S. 201.

39 Mileck S. 201も参照。

40 イメージ・シンボル辞典 S. 589.